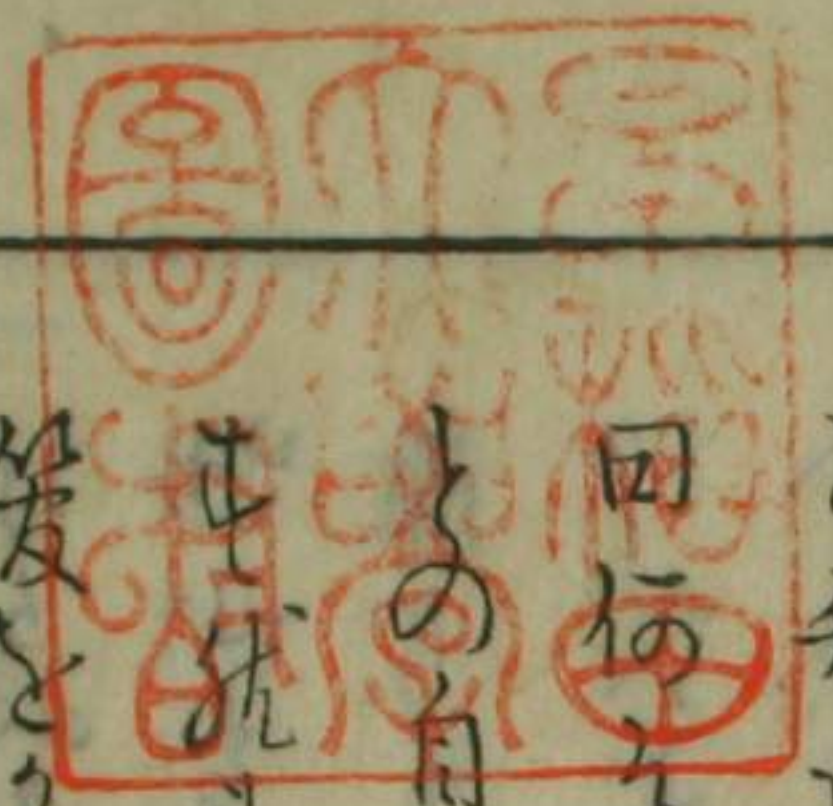


特
邊 13
991
止



遠
門
991
卷



天狗藝術論卷四

一向塗りみ壺つ塗り十文字の溢り後の等の信あり何れ

の利のいん

回の何の向のこれの画のれの色の塗のハ突の物のあり突のこ

もの自在のなのますのハ家のみのあのつのくの意のみのハあの

正の統のまのしの或のハ謙のを付の柄のに溢のは仕の込の或のハ

策のをうのけのくの用の家のこのもの先の人の乃の好のと家

不のよりの利のを工夫のこのものうのつのてのあの働のを

極のめのくの此の道のをの用のくの自在のなのちのくのるのもののなり

今のも流の美のを学のぶ者のハ初のよりのもの思のみのくの仕の習の

王喜

ひさるこゝをれ、他の器より、ハ手ニ熟よし、これ
器を以てて、ちと利あるべし、
てちの道不傳ふに、至てハ持たざるも、
たうへし、今後こう学まなぶ、つ才さいをあはれ、
物小ち此あひ、まゝひ、まゝ、
通り、まゝ、
り、ハ、
へ、
こ、
至、

ハ、
よ、
こ、
あ、
取、
の、
一、
左、
の、
道、

解^{しき}氣^きは引^ひきさ^さず指^{ゆび}の先^{さき}までと氣^き乃^{すなは}び往^{ゆき}り
 亦^{また}マ^まに氣^きを熱^{あつ}身^み小^こ充^ちめ^め禪^{ぜん}家^かの數^{すう}息^{そく}
 觀^{くわん}のこ^ころ呼吸^{こそく}乃^{すなは}ち息^{そく}は教^{けう}へ居^ゐに初^{はつ}乃^{すなは}ち内^{うち}
 呼^こ吸^{そく}あ^あらきこのか^から^らに^に漸^{ぜん}く^くに呼^こ吸^{そく}あ^あら^らま^ま
 なる時^{とき}氣^きを活^{くわく}しく^く天地^{てんち}小^こ充^ちめ^めこ^ころ^ろに^に
 息^{そく}を^を活^{くわく}め^め氣^きは^は活^{くわく}み^みは^は何^{なに}れ^れ氣^きを^を内^{うち}小^こ充^ちめ^め
 め^めく^く活^{くわく}ま^まら^らなり^{なり}此時^{このとき}不^ふ積^{じく}聚^{じゆ}乃^{すなは}ち病^{びやう}あ^ある^る
 ハ胸^{むね}脇^{わき}のあ^あら^らび^びそ^そ痛^{いた}乃^{すなは}ち何^{なに}ら^ら不^ふら^らま^まら^らま^ま
 亦^{また}く^く氣^き味^{あじ}何^{なに}れ^れき^きこのか^から^らに^に此^{こゝ}ま^まま^まら^らら^らら^ら
 ず^ずり凝^{じやう}る^る氣^きは融^{ゆう}和^わせん^{ぜん}と^と氣^きは^は動^{どう}しく^く動^{どう}ま^ま

氣^きは^は腕^{うで}の^のう^うら^ら呼^こ吸^{そく}この^{この}也^{なり}此時^{このとき}多^{おほく}く^くハ腕^{うで}の^の内^{うち}
 の氣^き味^{あじ}あ^あら^らき^き小^こお^おと^と活^{くわく}ま^ましく^く止^{とど}ま^まる^るの^のなり^{なり}此時^{このとき}
 ハ初^{はつ}初^{はつ}に^に充^ちま^まり^り充^ちる^る氣^きは^は改^かめ^めの^の掌^{てのひら}を^を以^{もつ}
 て^てア^アら^らら^ら小^こ抑^{おさ}へ^へ揉^もへ^へ強^{つよ}く^く拍^うと^とき^きハ彼^か動^{どう}
 中^{なかに}邪^{よこしま}氣^きに^にさ^さら^らる^る却^{かへ}て^て活^{くわく}ま^まら^らる^るこの^{この}ま^ま
 甚^{こゝろ}突^つ上^{の上}亦^{また}時^{とき}ハ各^{おのづか}に^に熱^{あつ}しく^く腕^{うで}乃^{すなは}ち上^{うへ}二^{ふた}
 小^こ久^{ひさ}しく^く活^{くわく}ま^まら^らる^る氣^きを^を兩^{りやう}へ^へあ^あけ^けま^まる^る也^{なり}
 故^{ゆゑ}に^に突^つ々^つしく^く活^{くわく}ま^まら^らる^る氣^きを^を以^{もつ}て^て虚^{きよ}か^から^ら
 兩^{りやう}の^の氣^きを^をこ^ころ^ろに^にあ^あら^らま^まる^る亦^{また}背^せ小^こ病^{びやう}あ^ある^る也^{なり}
 ハ必^{かならず}せ^せま^まら^らる^る氣^きは^は不^ふら^らま^まら^らる^る也^{なり}只^{ただ}氣^きの^の

らざりやふまへし肩と胸とを穿くこと習
 ひれり支れ肩をぬき出し入りにひく時
 気伸ぶとのちり。○此道氣を以て氣を穿
 の術ちりる時身心滞り心と氣は
 時ハまことこは心氣に一体ちり此術ハま
 け氣乃滞りて解く事侍下たあまこと
 すこれ術なり略ハ拙者に蝶なるのちり
 てせしむを排ひてさくちけはくそ
 上みく彩くまに衣敷を差し奇廉外家
 下小居あうこと補たよ内法浄外法浄

とくことある内法浄ハ心垢潔くまじく私
 念ある乃穢を去り、世欲せ我れを捨ふ
 之る元本固有の天志を成しるなり外
 法浄ハ身垢いさくし衣服居所を改め
 元垢をくく外乃邪氣の内へ移さるる
 ありて内法浄は助成なる内法は一體
 内法浄の外外法浄あるふハ何れ心氣
 色と一体なる氣ハ元乃内法浄の元乃
 用をちり心ハ靈なること如くして此氣不
 なるゆれものなり氣を換する時ハ心おの

滞りぬく氣實しく病おのけく生る形
 正しくされぬ氣停る不あり立く終まら
 も同じ人々向ひ坐し或ハ物不對ん
 ハ事故勢取時も同じ胸と肩と故并きて
 氣のうごよはことぬく滞ることぬく熱身指
 のせんまてとぬく乃充りぬはる心故付し
 奇淫しく色を多ぬする時も飯を喫し
 茶飲時と浴ぬあまもはも為小かくは
 しく心を付取時ハ後を不取の事よ成て
 自然不氣活まらぬのちり不取かくれとく

ちれ時ハ不之の變不應すること迷りぬり
 情まらぬハ死氣よ成て用よ應することよまき
 とのなり落付しと沖刃と似く是ちち若
 ちりしゆり試て志れへ此道文才ぬ初
 学幼童といふも心故付進ハ学まらぬことと
 ちりしゆり成易きことれし小子輩の立廻り
 茶の湯蹴鞠一切此小藝云々舞躍乃れとて
 しまりしゆり生活せよは時ハ形の初熟手
 足の續き美なりしゆり應用の不作も滞る
 とのなりぬみハ情と氣不ちりて何乃心もま

の変わりも應一マキ一但浮気ハ根好一生活
小はあゝの似く又あつ

一昔或系浮信小童小おへくく怖一き而
通系となハ肢故をりて性るへ一かろ海一き
本ハち比之のちりといひ一よ此方使れ
肢とちる肘ハ氣を引下て下小あはまり漸
ハ氣内小みちてつゝなりとのちり氣虚
欠あ一く上小あるゆへ一おとらきまを
ことこのま

一亦歩ゆする若故及るに常人多ハ上げア

ゆゑあ一頭とつゝ合く歩ゆ一或ハ五俵
持くあつゝ若く歩ゆする若ハ纏より一
動くことれく足故以て歩ゆする若小俵
み一て腕腕故持ことれく形疲ざんとのちり
駕輿下乃歩ゆするを足て志る一剣戟を
扱くゆ者氣濁ゆゝゝとるときハ足故以
てゆことあゝの頭再つゞゝ不神故とむ
まはうゝとら小換あまゝ丸ゝゝいて心志ゆゝ
す刀ハ右故先み一塗ハ左故先み以立時ハ
前足故活ゝゝ立とのちり一切乃事これ

常不後まゝし路はゆきまうしと望し
を祓ても人と對しても工夫あることあり
樂れ夫夫の足はくひを足るにこそ先を
そりそすむ足は活し踵を端てゆくこ
道別の風流はうりにあはすむ足はく足
を使ふも自由れまこと氣をまうつりて向
へひうしことれし鞠蹴者乃身はくひ足
づらひを同じ上手れ夫夫乃孫も所を後ろ
より突不激なることなりこそ是れ活し
て熱身も充下は定めてもく上は軽く動て

くこより亦なく臍下より呼吸して多は出
はくゆるちり下よは孫をハハハし碍り
もつまはき傷まふものなりこそ下軽く上
て定まはくはくこより生活は胸より上
めく呼吸し上はまよ成て下虚欠あるを
亦よはは淫物が多は呂へ落ま時臍下大
かろしものちりこそ是れ事ハ事ハ事ハ事
解し故に人乃歩けするに下軽く上はま
家老ハ平く疲るくものなり此等乃事ハ
限る事耳目ハ解る事ハ心を付て試事時

ハ天地の向此物ニレ工夫此種と云々天下
 師不ありといふこと此ニモなきに主あり
 是故未むるなり一切乃事我ニホ
 ありまむ此時ハ人よりありふることハ此也
 のなり軍事書不主人乃供をいしてゆくハ
 なる後古た山川地利此益ふん故付へーと
 いへる古への名もハ田夫勝人此不化を足て
 心付謀術此種也して功なきより大後
 軍中不ハ限る人々此事ありも万事ハ心
 を付ハ益故は事多う人々一視之を

是ハ死人ハ同一ハ事とあれ取らん
 一尚軍学ハ謀計を以て人を欺くの術なり
 此乃子習熟セハ必り小知故助る心術此害
 あらん歎
 曰君子是故用品時ハ國志治平此善とな
 り小人これを用はるときはおのむ故害ひ人
 故傷ハ此善となるへー一切乃事此然
 志ハ道不ものなりありて私心此まじ
 りまむ時盗賊の術故学の中よりまむ
 此を城を防ぐの善と成て志乃害を去

ことれ一志情欲利害^{リム}を以てしめて学
と此を聖賢乃書^イといへとも小知乃助と
成へ一故小先正乃此志を立是故変せし
て後万事^イ故学^イ一^イ家不正乃のまぢく
一^イ軍術等と学^イ功利の言を收めて
心此よ^イとき小知^イ巧をもちて是を
以て士乃^イとするは誤あ^イ一^イ劍術^イ故学^イ
その^イ此^イ藝^イに^イ孰^イ一^イ是^イ故^イ以^イて^イ辻^イ切^イ強^イ盜^イ
故^イを^イて^イ男^イ道^イなり^イと^イ一^イ藝^イ術^イ却^イて^イ力^イ
の^イ害^イ故^イ招^イく^イ一^イ此^イ藝^イ術^イは^イ罪^イみ^イは^イあ^イる^イ志

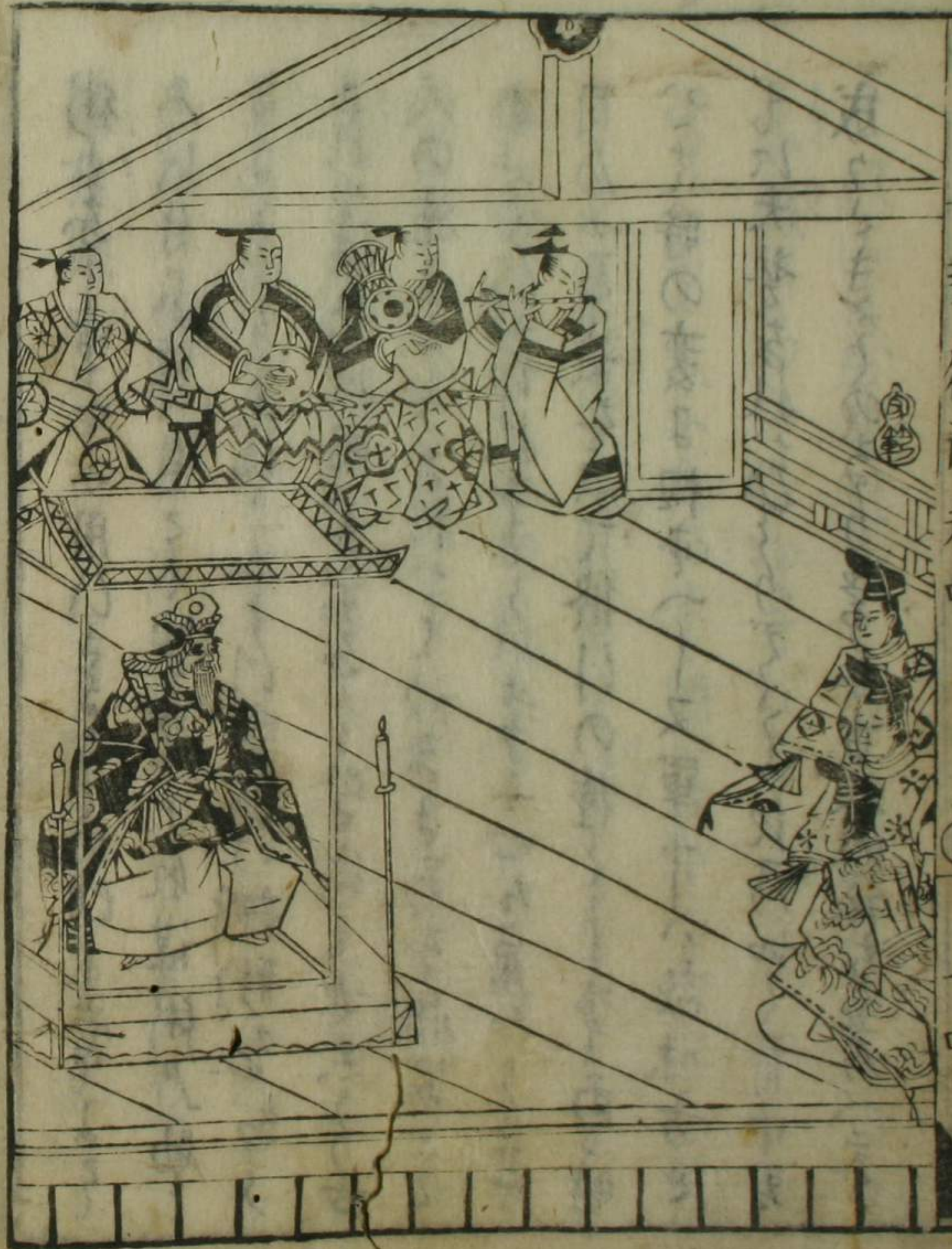
の^イ違^イへ^イあ^イか^イる^イ態^イ故^イ也^イ弁^イ慶^イ一^イ同^イ抄^イ物^イの^イ違^イ若^イ
勇^イ謀^イ兼^イ備^イへ^イあ^イる^イ大^イ剛^イ乃^イ者^イあ^イる^イ弁^イ慶^イは^イ是^イ
を^イ用^イひ^イて^イ忠^イ義^イを^イれ^イ一^イ態^イ故^イは^イ是^イ故^イ以^イて^イ盜^イ
賊^イ故^イを^イ故^イ一^イ謀^イ計^イハ^イ士^イ道^イ不^イあ^イる^イ一^イ是^イ故^イ也^イ
ち^イの^イ一^イ軍^イ忠^イ故^イが^イ士^イ乃^イと^イあ^イ加^イ列^イ安^イ宅^イ
の^イ要^イみ^イて^イ弁^イ慶^イの^イ杖^イを^イ以^イて^イ義^イ経^イ故^イ也^イ
忠^イみ^イの^イ一^イ君^イは^イ維^イ故^イ救^イひ^イる^イを^イ忠^イと^イ以^イて^イ
故^イ以^イて^イ論^イ一^イ事^イ故^イ以^イて^イ論^イする^イハ^イ不^イ智^イ故^イ也^イ
軍^イ法^イ多^イ人^イ数^イ故^イ立^イて^イ備^イへ^イを^イ設^イて^イ敵^イの^イ一^イ
は^イ我^イの^イ陳^イを^イ破^イく^イ一^イ奇^イ兵^イ故^イ用^イひ^イ謀^イを^イ以^イて

我々より用ゆる所あり故に將ハ人情を以て之を以て一安といひ今士乃學よ下ハ名将謀術の迹れく是古人乃糟粕あり其糟粕を學て精けを練り出すが其おれ量れり匹夫も其事お效いなくも事の本より時不あふのたゞこれをおまきものハ士乃量なり物以物を得候仕蓄るなる事これ事あり故に保級徳ト保遊軍皆それく乃法あり餘ある下崩き際のためこれみちまき川をさふことあり或ハ城を攻城を守り伏

奸夜討取に等軍ハ少の誤めて大崩進にあることおほし各も事取さすも場へ向ふるも練を志すべし大に取候んとすれは事もそれなり
一向家り謀取以て款取欺むくも款もあ謀を以て我をおどむく一豈にれひとり志れと
と何のて天下これ愚ちりんや
曰然りは乃言ふ下ハ押取の一通まつ其名を戲の手れ古より效ありて其理取尽すて此外に餘術なれごとくといへども又そ

上れよと出されどもあつて其名の定石な故ひ
象戯乃弱組造物等たさるゝハモ押形を
学小なるも家不自得する時ハ其中よりその彩
しきハ湧出く勝負を決むるなり凡てを
百一切れ事ハ其押形のこころなることさるゝ
いまだそのれア謀もまことかくのこころハ其
量母よハさるゝ古人乃押形ハ中より臨機應
変のこころハ其奇兵ハ謀術ハその時ハあつて
てお乃胸臆より湧出れ者なり古の良将ハ
漁樵賤夫れ志りぎを以て並ふことて彩しき

術とあり軍中ハ用ひたることおほし常より
ろ以付ふ時ハ見ことゆさるゝこれ謀術ハ助と
なるものあり然ともまハ古人乃押形を
ざれば後学ハ因へき事あり学術も亦去り古
人の迹よりさるゝされハそのゆさるゝを悟ふこと
あつたハ一切れ事ハ其彩ハ心を以てし
目乃さるゝ事を知て終りの種とハ事ある時
ハその時の変ハ但しハ一又軍中ハ款味方と
もハ大勢を以てひさるゝた乃如く自中
成りさるゝのちり事ハ古人の迹を考へ



法を出し士卒に練を誼引けいひき此自在に承りて
 侍に立承りて以て要と爲
 昔人父祖の陰徳いんとく不よく今日身みに福ありと
 いへども一念いんげんのくはるさかとたれ其より種たねに此
 妄心まがこころ生なじて終つひに天狗界てんこうがいに入り父祖乃すなはち陰徳を
 削くり身子みに禍わざはひおこし矢やよりも疾はやに汝等
 懼おそむ怯おそむ一ひと天狗界てんこうがいといふはちのまじり小知こちに
 慢まんし人ひとを侮あはれ人の強動きやうどうをなげ候まをひ是故ゆゑ
 以て是非得失乃すなはち境かぎになりて無事むじを承うりて
 と致いたす欲ほふ所ところを必かならずお乃すなはち省しやう

こゝちの只ちの道不徒小者故是と一ち乃道
に去とくえさふ老故非とい世間の是非を已
我執乃去とくみみ留めく彼を西とこれ故
能一或ハ怒り或ハ困むて常小心乃志所の
あること外これ佛亦小一日に三度熱湯
故飲て熱力より火熾を生いとい此煩悩の
苦くより種々諸動して邪をな一人を音
故等よく心を修一と気を収め魔界故去り
人間小出て道故求むへ一故等鼻去く此角
了翅あふを以て人小勝と王ととく愚人

を遊ぐは汝乃長地鼻尖是は此角幹き翅を
却て心を苦しめ人故音の無なり學術
劍術ともに只ちの道故去るを以て善教の
おの道故知ときハ内明このみく能悟一む
故小本のく家以故去るき老れ一くかとい知
是のれ一く過ちあるともあつ罪小一何とい
天は何する乃ちかの道故知くさは老も人を
初く亦私心を以て人を欺き勝故とれんと欲
する老をハ人其私心虚故討欲を以て人
故就小老をハ人其欲を勤して其動乃

善徳論卷中
十六

虚以討母を以て人と壓者とは人そ勢の衰
ふ雨を付川學術劔術これ同一只ち乃き
以てて世欲なる者ハ付へきれ虚外一勢
を以てて挫く一欲を以てて動る一巧
を以てて欺く一吾此を以てて思て者
不懐むといへとも允懐いませぬ只熱湯を
飲まずを少く免くこの天狗乃列
あつて何れ此の人間不出く道に悟らん志
たうく我うゆふに以て汝を示はのこといひ
既て草木震動一山鳴谷應へ風起りて

面以撲と尺て正多悟ぬ山と尺へハ屏凡み
てあつて寝取不遂と然とて計り

天狗藝術論卷四大尾

藝術論後

客あり此書を難して曰子う論す亦取
 理を并き情を尽志気の所変は汝以
 て未事乃應用を審るのみせ亦老人
 病身又ハ努め繁き者れ志は養ふ小ハ
 一のち王藝術修けれ共志はめおは是
 さは取何り曰吾 劍術者ふあはは何
 人故道守くことなせんや只弱冠より好むて
 藝術ある人小親多し其事乃利は討

祢氣の变化を試して其病を治しその
 理をゆり心術は澄せんことな求亦共志
 一ありくん不然契を依こしあはハ筆
 記しくヨウ童蒙に示はのし友人ヨウ童
 蒙よしのニ中頻り清小然道とも多言ふ
 して識者乃誘は招くんことなおける
 己むことな得はく天狗を備ふて戲談
 やむ瘰瘡を小冊予豈らつら是と
 勢んやか小七のちもせん

享保十四歲次己酉孟春大明五歲己酉土信

堀河錦上町下馬場所
洛陽 西村市郎右衛門

書肆

武陽 西村源六藏版

本町三町目北加出石三九

豐島町

殿工栗原次郎共衛

著者人太武言漸分爲
運二能其以重也

己酉年記



平

十四歲次已酉五

山本穢

海

平：張執公...
皆...人...言...也

紅印：...十...五...北...
P. 107

